

目次

| | | | |
|-----------------------|-----|-----------------------|-------|
| 寄稿: 大学院留学からシリコンバレーへの道 | 1-2 | 寄稿: インディアナ大学と多様性 | 7-8 |
| (江頭 良太) | | (米津 昌知) | |
| 寄稿: スイスでPh.D.を目指す | 3-4 | 特集: 英語で書く力を磨くために | 9 |
| (齋藤 諒) | | (大久保 達夫) | |
| 寄稿: 留学10年後振り出しに戻る | 5-6 | 連載: 効果的な推薦状を書いてもらうために | 10-11 |
| (児玉 直美) | | (加藤 雄一郎) | |

寄稿: 大学院留学からシリコンバレーへの道

Yahoo! Inc.
江頭 良太

Yahoo! Inc. でエンジニアと働いている江頭と申します。少し大仰なタイトルですが、大学院留学、就職をアメリカで経験した中で自分なりに感じた事を説明させていただきます。

留学の動機

私は2002年に、University of California, Irvine(UCI)のSchool of Information and Computer Scienceの博士課程に入学しました。その前日本では機械工学、精密機械を専攻し、修士まで在籍しました。修士では、位置情報端末や各種センサーを使い、動物の生態調査、物流のモニタリングの研究をしていました。留学を志したきっかけは、以前からあった留学に対する憧れと、学部や修士時代に在籍した研究室の先生や先輩で、留学経験を持つ方の話が面白く、影響を受けたという点があげられます。また修士時代に参加した大学主催のシリコンバレー訪問ツアーで、Stanford大学、現地のVenture Capitalやエンジニアの人の話を直に聞いて刺激を受け、いつかはここに来たいという気持ちを抱きました。留学時に専攻をhardwareからsoftware寄りに変えたのも、その時の影響があります。ただその時様々な方から、アメリカの大学のPhD(博士)はとてもレベルが高いという点を強調されすぎて、逆に反発する気持ちを抱き、そんな言う程か、それなら行って確認しようという気持ちになったのを覚えています。

修士1年の秋、冬頃に留学すると決めてからは、準備が大変でした。帰国子女でもなく、せいぜい受験英語が得意なぐらいのレベルだったので、TOEFLも一年間近く毎月受け続けて、奇跡の回が舞い降りてくるのを祈ったり、GREにも苦戦しました。留学準備に関しては、Web上で有用な情報が手に入りますので、詳細は省略します。

留学生活

私は在籍したUCIのコンピュータ科学専攻(ICS)の博士過程は、他の大学同様、前期課程(入学後2年程)でcourse requirementsを終わらせた後、授業の習熟度を測る試験(qualifying exam)と、その後行う研究テーマを発表する試問を受けて後期課程に進み、その後は自分の研究に集中する形です。私が所属する研究室は、コンピュータネットワークや分散システムという分野に強く、私もそれに関連する研究テーマを選び、一年目から授業と平行して研究も行っていました。ただ、コンピュータネットワークは既に成熟した分野で、ある程度新規性のあるアイデアがないと、なかなかいい論文になりません。私も博士論文の核となる案の一つが浮かぶまで、いろんなテーマに手を出して、試行錯誤しました。最終的に経済のコンセプトを取り入れたネットワーク資源管理の仕組み、(タイトルだけでは意味不明かもしれませんが)を考案して、論文にしました。

また自分の研究以外にもやる事が多いです。アメリカの博士課程は、学生の学費や給料がサポートされます。大変ありがたいのですが、それはボスが、政府系の研究資金機関(NSF,NIH等)や軍関連、または一般企業から、競争的研究資金を獲得することで、そのお金が学生に回る形になっています。資金を獲得するために、魅力的なプロポーザル(研究計画書)を提出する必要があるのですが、その時期になると研究室総出で協力して、あーでもないこーでもないとやっていました。

ちなみに、博士課程を通して痛感するのが、英語で論理的な文章を書く力の重要性です。研究論文にしても、研究資金のためのプロポーザルにしても、紙に書かれた内容のみで判断される場面が多く、どれもが研究者としての業績を大きく左右するものです。

つまりいくら研究が素晴らしくても、それを正確に、または大袈裟に伝える文章がかけないと、評価してもらえません。これは日本ではなかなか鍛えられない部分だと思います。

就職活動と面接

私は大学院留学前から、アカデミア志望ではなく、一般企業に就職するつもりでしたので、卒業一年前あたりから、どの企業がいいか考え始めました。研究室で日本の情報通信関連のいくつかの企業とも共同研究を行っていたため、実際に就職に関する話を聞いたり、自分の研究を発表させて頂いたりしました。ただ、研究室や、学科内で仲良くしていた先輩達の多くがYahooやGoogleのようなWeb系のIT企業に就職していたため、いろいろ教えてもらいました。実際に、Yahooに勤めていた先輩にリファァ(履歴書を回して)して頂き、面接を受けたのが、現在の職につながっています。

シリコンバレーのIT企業の就職プロセスは概ね、最初にphone screen(電話面接)を受け、結果が良ければOnsite interview(会社での対面面接)に呼ばれます。会社がそのための渡航費、ホテル代等を負担してくれます。Onsiteは1日がかかりで、大体5~6人と順々に(一人につき45分程度)会っていきます。面接内容は非常に



現在の職場Yahoo!の様子。

技術的な内容で、エンジニアであれば、その場で問題(データ構造、アルゴリズム等々)を与えられて、解法を説明したり、実際にそのためのプログラムを(大体は馴染みの深い言語を選ばせてくれます)ホワイトボードに書いたり

します。例え新卒に対しても、求める職種に必要とされる技術、経験は予めJob Descriptionに細かく指定しており、面接官が分担して、それぞれ必要な分野に関する質問をしていきます。

研究活動が忙しい時期だったため、面接準備も大変だったのですが、聞かれるのが技術的な内容のため、博士後期用のqualifying examの試験勉強をもう一度するような感じでした。実際に同じ教科書を読み直したりしていました。また自分がqualifying examを受けた時、形式がなぜか前年度の筆記試験から口頭試験に変わり、五人の教授に囲まれて質問を出され続ける拷問のような形式になったのですが、それに比べればまだましという気持ちが楽にさせてくれました。

Ph.D.の意義

現在所属するチームでは、社内のコンテンツやユーザに関する大規模なデータを保存、計算するためのシステムの開発を行っています。中で働いてみて、シリコンバレーのIT業界で、エンジニアにPh.D.がそもそも必要かという話は実は意見が分かれる所です。もちろん専門分野と職務内容が重なれば鬼に金棒ですが、あまり関係がないというケースが大半でしょう。周りを見ると、Masterを取って就職した人が層としては一番多い印象です。それは、Ph.D.取得にかかる時間的、金銭的なコストはもちろん、そ

れ以外にも、多くの職種(研究部門は除く)では、アイデアを出すだけではなく、実際にプログラムを書いて形にする事が重視されますが、それは必ずしもPh.D.のプログラムで重視されている事ではない事も挙げられます。(早く職場で経験を積んだ方が有利と言う人も多いです)

ただ私自身は確実に助けられたいいくつか点があります。一つは同じ研究室や学科内で得られる友人関係です。Masterよりも格段に長いPhD(4年~7年)において、苦楽を共有する仲間とは特別に仲良くなり、その後の人生でも助け合う場面があります。またその仲間が卒業後散らばり、様々な分野の会社や大学で仕事をしている場合、生々しい情報交換もできますし、そこで求められている技術や経験のレベルが大体想定できるというのもあります。(同じ教育を受けた同僚が活躍しているわけですから、必要以上にびびる事がなくなります)

また、アメリカではPhDの学位がある程度人材の質を保証するものと考えられており、ただでさえ英語で不利のある留学生にとって、仕事探しの際には有利に働く事が多いと思います。(日本のように逆に不利になるような事はないです。)

それ以外には、論理的なコミュニケーション能力です。PhDでは、既存の問題や研究のアイデアを絶えず研究室内で議論します。また自分の研究の新規性、有用性を、自分のボスや他の教授陣に説明して納得してもらわないと卒業できません。そのため論理的にコミュニケーションを組み立てて行く能力が必要になります。エンジニアが問題を解決する際、一人で黙々とプログラムを書いて完結することは少ないです。例えば現状のシステムの問題の発見にも複数の人が関わり、設計や細かい実装の段階でも他のエンジニアと議論し、説得していく必要があります。その際にPhDでの経験が生きる場面が多いと感じます。

以上の話がこれからシリコンバレーで働こうと思っている、または博士課程に留学しようと思っている方に少しでも参考になれば本望です。もし具体的な質問がありましたら聞かせて下さい。個人的にも返答します。



UCIの卒業式にて(筆者は写真後右から三番目)

江頭良太
Yahoo! Inc.
University of California, Irvine
School of Information and Computer Science Ph.D. 取得
ryota.egashira at yahoo dot com

寄稿: スイスでPh.D.を目指す

私は2013年6月より、スイスのバーゼルにあるFriedrich Miescher Institute for Biomedical Research(以下FMI)で細胞生物学専攻のPh.D.学生として学んでいる。バーゼルはスイス・ドイツ・フランス三国の国境近くに位置し、NovartisとF.Hoffmann-La Rocheという世界的な製薬企業の本拠地があるスイスの学術都市のひとつである。スイスのようなヨーロッパのPh.D.コースの知名度はアメリカやイギリスに比べて低いのが現状だと思う。私は修士まで早稲田大学に在籍していたのだが、そもそも周りに学位取得目的で留学している知人は全くおらず、情報収集から受験まで何かと苦労した。本記事では、自らの留学準備を振り返るとともに、FMIでの学生生活について紹介したい。これから学位取得目的で留学しようと考えている方の何らかの助けになれば幸いである。

日本の博士課程か?海外のPh.D.コースか?

海外の“サイエンス”を意識し始めたのは、学部2年時にロサンゼルス郊外にあるBeckman Research Institute of City of Hope(以下CoH)に1ヶ月ほど短期留学したときである。広大、自由、そして活発な研究環境を目の当たりにして、私はただ海外で研究することに憧れた。帰国後はTOEFLやGREなどの留学用テスト勉強に取り組んでみたり、留学説明会に参加したりと意気込んでいた。しかし、研究室に配属されてからは日々の実験に夢中になり、海外への想いは次第に薄れていった。

「どちらが良いかという問いには絶対的な答えはない...行けるチャンスが少しでもあるならば、それにチャレンジしない手はない」と受験を決意した。

転機が訪れたのは、修士2年間近のある日のことである。ネットサーフィン中に偶然、米国大学院学生会のメンタープログラムに出会った。当時、早稲田の博士課程進学を考えていた私だが、完全に海外のことを忘れていたわけではなかった。どう転ぶにせよ、海外にいるPh.D.学生の方に意見を伺えるチャンスはめったにないと思い、研究分野の近い当ニュースレター編集部の石原さんにお伺いを立てた。その勢いで2ヶ月後には石原さんのもとを訪れ、ハーバードの学生・ポスドク・駆け出しのPIなど色々な人に意見を伺った。そして到達した結論は、日本の博士課程と海外のPh.D.コースのどちらが良いかという問いには絶対的な答えはない、というほぼ自明のことであった。そのため帰国後も「仮に受験したとしてどこか受かる保証はあるのか?博士課程もここに残ることに決めて、研究に集中すべきではないのか?」と結局、修士2年の夏くらいまで悶々としていた。

だが最終的に、「行けるチャンスが少しでもあるならば、それにチャレンジしない手はない」と受験を決意した。指導教官に相談

することもなかったため、研究室や所属学科に迷惑をかけることになってしまい、もう少し早く決断すべきだったと後悔している。当初はアメリカの大学院のみを候補に考えていたが、幸運なことにCoHで知り合った研究者がオーストリアでポスドクとして働いていたため、その方にも助言をいただき、ヨーロッパの研究所を加えて、合計十数校に出願した。最終的に、5つのプログラムからオファーをいただき、以下に述べるように魅力的な研究環境とフレンドリーな現指導教官との出会いがあったFMIに留学することに決めた。

自らの留学準備を振り返ってみて効果的だったと感じることは次の点である。まず、とにかく現地にいる研究者の方と連絡をとり、可能な限り生の情報を得ること。日本人の性格上、見ず知らずの相手にいきなり連絡を取るのには憚られるかもしれないが、よほど無礼な文面でない限り、おそらく快く対応してくれるはずだ。そして、アプライする大学には前もって訪問すること、望ましくは何らかの研究関連のイベントがよい。私自身、アメリカの方でオファーをいただいたカリフォルニア大学サンディエゴ校とCoH、それぞれ学会発表、短期留学のため公式に訪問経験のある研究機関である。



研究室の同僚と。最後列右から2人目が指導教官。3人目が筆者。

製薬企業傘下の研究所での学生生活

さて、私の所属するFMIは、製薬企業Novartis傘下の生物医学研究所である。製薬企業付属というと研究内容も薬理・創薬のような応用的なものを想像されるかもしれないが、実際は、Epigenetics(エピジェネティクス: 遺伝子の働きを調節する機構について)・Mechanisms of cancer(がん発生と進展の機構について)・Neurobiology(神経生物学)、を三大テーマとし、基礎生物学に特化した研究所である。私自身はPatrick Matthias教授のグループで、DNAを巻きつけるヒストンというタンパク質を修飾する酵素群の研究をしている。FMIにおいてPh.D.学生はバーゼル大学所属となる。バーゼル大学の講義を受講し、所属研究室において学位論文をまとめることで、大学より学位が授与される。製薬企

業から資金が下りていることもあり、実験環境は申し分ない。ピペット、チューブ、フラスコ等の器具、そして緩衝液や細胞用培地などは全て研究所共通の消耗品として無制限に利用可能な上、各研究室は日本円でおそらく年間1500万円程度(あくまでも私の推測です!)の研究費をNovartisより受け取っている。この基本条件の上で各研究室のPIはスイス国内あるいはヨーロッパのグラントからさらに研究費を獲得してくる。資金がありさえすればいい研究ができるというわけでは決してないが、資金不足から実験内容が制限されることがほぼないのは素直に利点といえよう。25ほどあるラボ間の交流も盛んであり、試薬や機器の貸し借りから、実験プロトコルの共有などが自由になされており、非常に生産効率がよい。平均して1ヶ月に2報は、どこかしらのラボからNatureなどトップジャーナルあるいはその関連誌に論文が掲載されるといった状況である。そしてほぼ毎日のように外部研究者によるセミナーがあり、さらにはPh.D.学生であっても希望すればいわゆる大御所の来訪者と1:1でディスカッションできるため、研究に関して見聞を広めるといった点でも最高の環境であるといえる。

スイスのPh.D.コースの魅力は何であろう?第一に、流行に左右されずに研究に取り組めることがあげられる。ホットな分野に注目し、上手くいった場合にインパクトファクターが高い雑誌に載るような仕事を設定する、というよりも、まだ分かってないから知りたい、という純粋な知的好奇心で仕事をしている研究者が多い。第二に、コースワークがほとんどなく、研究室のローテーションもない場合が多いため、早ければ4年程度の年数でPh.D.取得が可能なおことである。この年数設定は日本の博士課程に似ているといえよう。これら二点はスイスに限らずヨーロッパのPh.D.コースの長所といえる。最後は生活面に関してだが、スイスのPh.D.学生には一律、日本円にして月40万円程度が最低賃金として与えられることになっており、物価が高いスイスといえども、金銭的な問題はほとんど生じない。というよりも、これは家族を持たないPh.D.学生にとっては十分すぎる額であり、週末に国内のリゾート地や他のヨーロッパ諸国に遊びに行く学生も多い。

留学準備を通して学んだこと

多くの人々に助けられ、自分は今スイスにいる。文系で私のやろうとしていることが理解できないはずなのに、何も文句を言わずに理解してくれた家族。短い付き合いしかなかったにも関わらず、快く推薦状の作成を引き受けてくれた先生。合格が決まるまで、どのような状況か気にかけて度々メールをくれた石原さんを含むアメリカのPh.D.コースに留学している先輩方。そして、突然の決断を受け入れてくれた学部・修士時代の指導教官と学科の友人たち。などなど、挙げ始めればきりがなし。人々との出会いひとつひとつはふとした巡りあわせから生まれたものにすぎないのだけれど、そうした出会いが私の挑戦を支えてくれていることをあらためて感じ、幸福感に満ち溢れた留学準備期間であった。スイスに来てから私の出会いはますます広がっている。ひとつひとつの出会いを大切にしながら、まずはPh.D.取得を目標に生命科学を楽しんでいきたい。

本記事では、ヨーロッパのPh.D.コースの出願方法から選考の過程、学位取得までの流れなど不明瞭な点が多いと思います。もし疑問点があれば気軽にご連絡ください。



齋藤 諒
Friedrich Miescher Institute International PhD program
中島記念国際交流財団奨学生
makoto.saito at fmi dot ch

齋藤君と知り合ったきっかけは、米国大学院学生会のメンタープログラムでした。分野も同じ生物系で話が合い、一時帰国の際には東京で会うこともでき、彼がボストンを研究室見学で訪れた時などお互いの研究の話などで交流が続きました。僕自身が留学で大学院出願でアドバイスできることはアメリカの生物系大学院のみで、スイスへ留学してからはの話はそこまで詳しく聞いていなかったのも、年末年始に久しぶりに連絡してみた折に、今回のスイスでの留学生活について文章を書いてもらえないか頼ってみました。

僕も最近卒業後の進路を考え始めました。僕自身はヨーロッパへ移って生物学の研究を続ける選択肢を真剣に考えています。理由は研究の質の高さ、アメリカとは違った研究の流れ、アメリカとは違った文化に対する興味でしょうか。そんな僕にとってアメリカだけでなくヨーロッパ諸国の大学院プログラムも受験し、研究所を訪問した齋藤君の話はとても参考になります。こうやって世界中に友達や研究仲間ができるのも日本を飛び出すことの面白さだと思います。学位留学を考えている人もいろんな選択肢を吟味して留学に挑戦してもらえたらと思います。

石原 圭祐
PhD candidate in Systems Biology
Harvard University
かけはし編集部

寄稿: 留学10年後振り出しに戻る

“米国“留学生会というニュースレターですが、今回はドイツへの留学について寄稿させていただきます。私が博士号を取得してから7年ほど経過しているので記憶のほうも定かではないですが、いろいろな問題も多く起こりましたが、今となっては美化されて良い思い出と経験しか残っていないような気がします。

まずスイスでインターンシップ

ドイツで博士号を取得するまでの道のりは当時の自分の個人的な状況と、日本のアカデミアの社会的な問題の両方が私を後押ししました。当時の社会的な問題というのはいわゆる“ポストク問題”というものが取り上げられ始めたころでした。優秀な先輩が就職に苦労している状況や大学院重点化によって、教員のポストが減らされる状況を端からみていて、なんの強味もない私にこのままの状態ではアカデミックポストが得られるとは到底思えませんでした。だからと言って、日本で大人しく就職活動をするのは面白くないとも考え、まず“海外に行く”決断をしました。なので、当初はその後アカデミックポジションを目指すことは考えていませんでした。私の今の状況も全てその時に“自分にとってベストで面白い”と思う選択をしてきた結果です。



学会でのエクスカージョンにて(スイス)

当時の指導教官にも相談をしたところ、海外へ行って漫然と過ごすのは若い私にとってはリスクが高いので何か履歴書に書けることをやったほうがよいというアドバイスをいただきました。語学留学も実りの多い留学だとは思いましたが、ヨーロッパの多くの大学では単位としてインターンシップを行うことを知り、いろいろなつてを訪ねてインターン先を探す活動をしました。そうこうしているうちに、ある国際的な社団法人(www.iaeste.or.jp)が理系学生を対象としてインターンシップを斡旋していることを知り、応募をし、運よくその社団法人を通してスイスの研究所(www.eawag.ch)でインターンシップをさせていただくことになりました。これが私の海外での生活と就職の出発点となりました。その後、いろいろな縁がありドイツフライブルグ大学で博士号を取得することになったわけです。

ドイツの博士課程のしくみについて

ドイツでの博士課程については日本では馴染みがないかもしれませんが、伝統的な方法は“博士課程”ではなく研究プロジェクトのアシスタントをしながらその間に論文を書いて博士号を取得する方法です。最近では多くの大学でいわゆる“博士課程”コースが設置され、その中で学生はクレジットを取得し、体系だったコースの教科を学習した後に大学から博士号を授与されるしくみもできたようです。前者の場合は研究プロジェクトから給与を支給される大学の契約職員として扱われ、学生としては扱われず寧ろ大学で“働いている”状態ですが、後者の場合は資金源は自己資金か奨学金で生活をしている学生として“勉強している”状態です。前者の場合の博士号取得条件は所属する教授の一存で決まることが多く、客観的な条件は明確に書かれていないことが多いです。

私はスイスでの労働経験が経歴として生かすことができ、研究プロジェクトの資金で雇用していただけ、EUのプロジェクトの一部の仕事をするようになりました。共同研究をする研究者はドイツ人だけではなかったため英語でのコミュニケーションが中心でしたが研究室のテクニシャンやフラットメイトとのコミュニケーションにはドイツ語が不可欠でした。ドイツ語は日本を立つ前に学習しましたが、当初はドイツ語はほとんど話せない状態でした。ドイツ語の習得にはかなり苦労しましたが、どうにか2年くらいで研究室でテクニシャンとのコミュニケーションや役所の人とのビザの交渉ができるようになりました。

研究プロジェクトについて

私の専門は森林水文学といって文字を読んだだけでは何をやっているのか分からないと思いますが、水や物質がどのくらいの量をどのように流れているのかというようなことを研究する分野です。その中でも私は森林を問わず農地や草地の植物を通過する水や物質の流れを研究していて、気候変動と連動して様々な分野の研究者が集まって大きなコミュニティが形成されています。ドイツでの研究プロジェクトはライン川の周辺の植生地(農地と森林)の水と物質の流れをモニタリングして、気象条件によってどのように変動するのかというメカニズムを解明することでした。ライン川の周辺のフランスのストラスブルグ大学とスイスのバーゼル大学との共同研究でした。この研究プロジェクトにおいても気象学者や各国の研究者と一緒に研究をさせていただきました。

また所属していた研究室にも世界各国からの研究者が短期で滞在しており、これらの研究者と一緒にフィールドに出て仕事をさせていただく経験や、度々、国際会議にも参加させていただきました。その中で会食に同席させていただいたりすることで、仕事をすることでその後のネットワークにもなっています。実は私が博士号を取得する1年ほど前に私を直接指導していた指導教官が“失職”

し(ドイツには独特のルールがあり教授職などではない限り大学に10年以上雇用されてはならないというルールがある。)、オーストラリアへ行ってしまいました。もちろん私の指導は続けてくれ、さらに私もオーストラリアへ滞在させていただく機会を与えてもらったということで私にとっては幸運でした。さらにこの滞在は最終的には私のポスドク先へとつながったのでした。ドイツでの博士号をとるまでの仕事は本当にばたばたでいろいろな人にあっているような出来事に遭遇しましたが私にとっては若い間に異国で揉まれ、仕事のネットワークを形成できたのは本当に幸運だったと思っています。結局最後までドイツ語は上級者レベルまで達することなく終わりましたが、なんとかディフェンスも英語で行いディフェンスの前に次のポスドク先も決まっていた。

地球の裏側でポスドク

オーストラリア滞在中で知り合った研究者が当時ニュージーランドの研究所で研究職についており、そこをポスドク先として選びました。私の指導教官はスイスでのポスドクを勧めてくれましたが私の考えではニュージーランドへ行って英語のブラッシュアップをしたいということ、当時ニュージーランドのホスト研究者の若さと勢いに乗っかきたいという考えがあったからです。またこのホスト研究者は女性ということもあり、私にとってロールモデルとしては最適だと思ったからです。ニュージーランドへ行って気が付いたのですが、彼らの英語はかなり独特で当初キウイ英語(※ニュージーランド英語の呼称)には苦労しましたが、ネイティブのニュージーランド人のフラットメイトやその家族に助けられて私も少しはキウイ英語を習得できたと思います。

研究では北半球と南半球の場所を生かして南半球の冬の間は主に、ヨーロッパに戻ってフィールドでのデータ取りという生活を2年間しました。ニュージーランドの所属していた研究グループにも得に夏の間はいつもゲストリサーチャーが滞在しているいろいろな人をボスに紹介していただけました。そこでヨーロッパから見ると地球の裏側である小さな国であるニュージーランドでしたがゲストで訪れた研究者や参加した学会で紹介いただいた研究者、また夏の度にヨーロッパに行かせてくれたホスト研究者のおかげでこれまで築いたネットワークは途切れずにキープすることができました。

日本で4ヶ月ポスドク後、つくばの独立行政法人へ就職

日本へは日本学術振興会というところからフェローシップ(いわゆる国内学振)を頂いて3年間ポスドクをする予定でした。帰国した当時日本は男女共同参画の走りで“女性研究者”を増やす計画が始まっているところでした。当時もう私は日本では“高齢ポスドク”に片足を突っ込んでいる状態だったので学振の受け入れの先生からもチャンスがあったら就職してくださいと言われていま

た。帰国してすぐに応募できるポジションがあり、半ば無理矢理応募させられたのが次のポジションとなりました。私はそれまで日本で働いた経験がなく、かつつくばの研究所というのはかなり独特な場所だったのではじめはかなり苦労しました。就職先である農水省の研究所では私が所属したグループではポスドクを含めても女性研究者は2名だけでした。いろいろなショックを受けながらも、研究所の幹部には大変よくしていただき、研究のスタートアップに十二分にサポートしていただきました。3年経ってやっと十分な研究環境が整ってきたという状況でしたが4年目になりいろいろな節目を迎えました。

その後: 振り出しに戻る

日本に戻って4年目になり、つい最近のことですが、そろそろ自分の将来のことを真面目に考えて結婚する決意をしました。ところが結婚相手は日本人だけでもスイスジュネーブで働く人でした。いろいろなことを総合して、家族の後押しもあり私はジュネーブに引っ越すことを決めました。今はドイツで博士論文の指導をしていただいた元指導教官がPIとして所属しているWSL(スイス連邦政府森林・雪・景観学研究所)というところに所属させていただいています。パーマネントのポジションではありませんが、好きな研究を続けていくには自由度の高い身分です。これからは日本とヨーロッパを行き来しながらも研究のネットワークを広げていきたいと考えています。ただ、スイスではパーマネントのアカデミックポジションを得るのは並大抵のことではないので試行錯誤中です。



学会でのエクスカージョンにて(ニュージーランド)

児玉 直美

Swiss Federal Institute for Forest, Snow and Landscape Research (WSL) 客員研究員
University of Freiburg Ph.D. 取得

寄稿: インディアナ大学と多様性

インディアナ大学(Indiana University)の民族音楽学学科で東アフリカの音楽文化を学ぶ米津昌知(よねづまさとも)と申します。2年の修士課程を終え、現在は博士課程の1年目に在籍しています。ブルーミントン(Bloomington)の魅力とインディアナ大学のもつ多様性について紹介します。

街の概要

インディアナ大学は、州内に8つのキャンパスを持っています。私の学ぶブルーミントン校は州都インディアナポリスから車で1時間半ほど南に下った、学園都市ブルーミントンにあります。この街の最大の特徴は、世界各国の音楽家を招待するLotus World Music and Arts FestivalやLGBT(性別や性的思考の多様性)をテーマにした映画祭Bloomington PRIDE、自転車競技レースのLittle 500など、街の規模からは想像できない程、多様で活気あるイベントが行われていることです。特に、人口8万人のうち半分以上の4万人を学生が占めるブルーミントンは、過去に全米で最もパーティーが盛んな大学都市に選ばれたほど、(良くも悪くも)アクティブな若者で溢れています。

生活

B-townと略されるブルーミントンの中心は、大学の正門から続くカークウッド通りKirkwood Avenue (Fig1)で、レストラン、バーや劇場が並び、毎週末は学生で埋め尽くされます。この通りでは、トルコやチベットなど世界各国の珍しい料理が楽しめます。私がよく行くのはSamiraというアフガニスタン料理のレストランで、ここはランチがバイキング形式なので重宝しています。また、ワイナリーやビール醸造場が直営するバーがあり、お酒を嗜まれる方も楽しめる街です。



Fig1. Lotus World Music and Arts Festivalのカークウッド通り。

私は週末も図書館で勉強することが多いので、あまり参考にならないかもしれませんが、学生がよく遊んでいるスポットとして、前述のカークウッド通りに加えて、いくつか大学施設を紹介しま

す。IMUという学生会館(もしくは生協)のような建物がキャンパスの中心にあります。ホテルを併設しており、パーティー会場、レストラン、カフェ、ボウリング、ビリヤードや映画を学生のみならず地域住民にも提供しています(学生は比較的新しい映画が無料で観られます)。その他キャンパス内では、美術館、オペラを上演できる劇場、音楽ホールがあります。世界的に有名なジェイコブズ音楽院Jacobs School of Musicがあるので、レベルの高い音楽家のクラシックやジャズの演奏、またはコンテストを見ることが出来ます。



Fig2. 筆者、日本で民謡を学んだ日本語教師Molly Jeon、言語習得研究の院生Ryan Lidsterによる民謡の演奏 (Photo by Shaun Williams)。

私がアシスタントとして働く伝統音楽史料館Archives of Traditional Musicには、ブルーミントン出身の歌手ホーギー・カーマイケルの業績を称える展示室があります。私も日本の民謡と尺八を披露しましたが、ここでは不定期ながらアメリカのフォークミュージック、各国の民族音楽の演奏、それらに関する研究の発表を行っています(Fig2)。

最後に忘れてはいけないのは、インディアナ大学のスポーツ観戦です。NBA選手を多く輩出している男子バスケットボール部をはじめ、女子バスケットボール部や男女サッカー部が強豪で人気もあります。そこまで強くはありませんが、フットボールの試合のある週末は朝からスタジアムに向かう学生や家族で街が活気づきます。

自然について

インディアナ大学のキャンパス(Fig3)は、石灰岩で建てられた校舎が美しく、リス、ウサギ、アライグマやシカが顔を見せるほど自然に満ちています。春先と紅葉のシーズンは木々と校舎のコントラストが美しく、散歩に最適です。キャンパスから少し離れたところでは、石灰岩の採石場だった場所にできた池で泳いだり、モンロー湖やグリフィー湖ではカヌーをしたりと勉強に疲れたら息抜きが出来るレジャースポットもあります。

自然といえば、夏はハリケーンがよく発生するので、各校舎にはシェルターが設置されています。さらに冬は気温が零下20度になることもあり、一度雪が降るとなかなか融けないので街全体の足場が悪くなります。私はもっぱら自転車で移動しますが、街を縦断する自転車のコースがあり、春から秋にかけてはサイクリングを楽しむことも可能です。



Fig3. インディアナ大学ブルーミントン校、秋の風景

ブルーミントンの”多様性”

冒頭で触れたような、年に30を超える様々なイベントが開かれるブルーミントンは、“多様性”を尊重するコミュニティの存在によって支えられています。文化や性の多様性を守る住民の存在は、留学生にとって心強いものです。ブルーミントン市ではしばしばネオナチによるヘイト活動が起こるのですが、その度に住民による激しいプロテスト活動が行われます。こうした地域の住民や、中西部において最もフレンドリーといわれるLGBTのコミュニティの存在もあって、多様な学生が住みやすい環境が整えられていると感じます。2014年12月にはミズーリ州ファーガソンでの白人警官による黒人射殺事件を発端にしてデモ活動が行われました。私も参加しましたが、学生のみならず住民の強い政治的関心を感じました。また、ダライ・ラマが訪れるアメリカで唯一のチベット・モンゴルの仏教寺院があり、アメリカにおける様々なマイノリティの文化が根付いているのは非常に興味深いところです。

インディアナ大学の留学生

インディアナ大学では、近年、留学生の数が増え、2014年秋には8,000人弱の学部新入生のうち10%を占めています。中国、インドと韓国からの留学生が多く在籍しています。日本からの留学生は全体で100人弱と聞いていますが、ほとんどが英語プログラムでの短期の留学生です。アジアからの留学生の多くは、先ほど出てきたジェイコブズ音楽院とケリー経営学部Kelley School of Business、もしくはコンピュータサイエンスに関するプログラムに在籍しています。尚、ケリーはMBAのプログラムとして全米でもトップクラスと言われています。以下では私の学ぶ民族音楽学のプログラムを中心に、大学の特色を見ていきます。

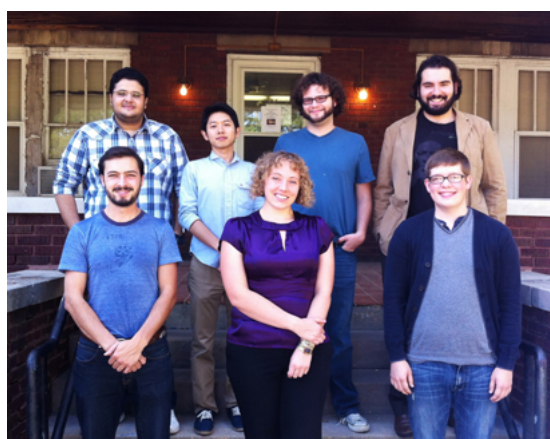
民族音楽学

民族音楽学は日本ではあまり知られていませんが、アメリカでは80以上の大学で学位をとることが出来る、ひとつの確立した学問分野です(インディアナ大学の場合は音楽学部から独立しています)。インディアナ大学の民族音楽学は、UCLAと並んでこの分野の成立に貢献した長い歴史と伝統をもつことで知られています。1960年代、当時人類学部の教授であったアラン・メリアム(Alan Merriam)が音楽を文化として捉える見方を提唱し、あらゆる音楽に対する学際的・民族誌的アプローチを進めたことが始まりです。現在では、パレスチナにおける音楽を暴力・ジェンダーといった社会的な視点から研究する教授や、学問の社会への還元を目指し、ハイチの音楽家とCDレーベルを立ち上げて、2010年の震災からの復興に取り組む教授など、様々な研究者が民族音楽学プログラムの授業をもっています。尚、冒頭のLotus World Music and Arts Festivalのディレクターも民族音楽学学科でフェスティバルに関する研究をしていました。

私はタンザニアの文化政策(主に植民地以降)が、どのように伝統音楽に影響を与えてきたかを研究していますが、この成果を現地の発展に生かしたいと思い(文化遺産博物館と共同で音楽祭の開催など)、公共政策大学院(SPEA)のNPOの設立とマネジメントを学びました。こうした学際的な学びができるのは、大規模で多様な学問分野をもつ大学だからこそその利点です。

また競争率は高いですが、院生に対して奨学金(授業料免除・給料)が提供されるポストが比較的多くあるのも、インディアナ大学で学ぶ際に特筆すべき点ではないでしょうか。例えば、日本語プログラムがあるので、人文科学部の院生であれば誰でも応募出来ます。

これで終わりになりますが、インディアナ大学、もしくは民族音楽学に興味を持たれた方は、ぜひご連絡ください。



民俗学・民族音楽学学科の同期の院生と (Photo by Michelle Melhouse).

米津 昌知
Indiana University
Ph.D. program in Ethnomusicology
m.yonezu at gmail dot com

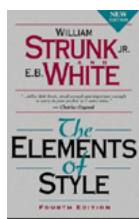
Writing is easy. All you have to do is cross out the wrong words.

—Mark Twain

英語で文章を書く力は重要だ。寝る時間を惜しんで考えついた理論も、やっとの思いで取れた実験データも、英語の論文にして初めて後世に残すことができる。論文以外にも、大学院入試での小論文や、グラント・奨学金の申請書においても英語で書く力は重要となってくる。むしろデータが出揃った論文と比べて、グラントは予備データを基に将来の研究の構想を展開する分、英語力に依存する部分が大きいともいえる。

英語で書く力をどのようにして磨いていくかは難しい問題である。時間をかけて構文を解析し、単語の意味や背景知識を調べることで向上できる読解力、言葉以外の手段も総動員できる会話力に比べて、どのようにして書く力を磨いていくかはさほど明らかではない。この問題に対して、既に種々の有益な提案がされているが^{1,2,3}、本記事では、私が最近出会った良い英文を書くための指南書を三つ紹介したい。

アメリカ人に「英語の書き方に関するお薦めの本は?」と聞いて真っ先に挙がるのが「**The Elements of Style**」であろう。コーネル

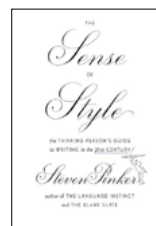


大学でのStrunk教授の講義を基に、著名な作家であるWhiteが手を加えて出版した古典的名著であり、短いながらも示唆に富んでいる。本書には、回りくどい言い回しを避け、直截的な文章を書いていくためのコツが述べられており、その要旨は「Omit needless words.」のわずか3語にまとめられる。列挙されているアドバイスも有益だが、同時にいかに明快な文章を書くかに精魂を込めるStrunk教授の気迫に圧倒され、背筋がピンと伸びる思いだ。是永先生の『理系留学のススメ』でも紹介されている通り⁴、何度も繰り返して読むほど味わいが感じられる良書である。

次に紹介するのがWilliamsとColombによる「**Style: Lessons in Clarity and Grace**」である。本書は有名な記事である「The Science of Scientific Writing」⁵で述べられている論点をより詳しく解説したもので、「悪文はどうして分かりにくいのか」、そして「それをどのように書き換えると良くなるか」が、豊富な例題とともに具体的かつ系統的に述べられているため、いままで感性に頼っていた部分に対してより論理的にアプローチ

する助けとなる。例えば、同じ内容を表すにしてもどのような語を主語に、どのような語を述語に選べばより分かりやすいかが説明されている。また他の記事でも紹介されているように⁶、読者に対してどのように情報を提示すれば分かりやすいかに関するアドバイスは極めて有益だ。

最後に紹介するのは、心理学者で一般向け著作も多いSteven Pinkerの最新作「**The Sense of Style**」だ。この本の大きな特長は、単に書く際に留意すべきルールが羅列されているのではなく、それらのルールの背後にある心理学、認知的な要因に関する説明が多く含まれていることだ。例えば「受動態ではなく能動態を使うべし」というルールがあったときに、「ではそもそもなぜ受動態があるのか」に関する考察がされており、逆に受動態を能動態に書き換えるとかえって分かりにくくなる文例も示されている。また分かりやすい英文を書くためには、英文法を理解することがいかに重要かが力説されており、学校で習ったときにあれだけ無味乾燥に思えた英文法が、書くために有用な道具であることを実感させられる。堅苦しいトピックを扱っているにも関わらず、本文に豊富に散りばめられたユーモラスな悪文のおかげで気楽に読める内容となっている。



これらはいずれも良書であるが、今日読んだからすぐに明日から英語が書けるようになる性質のものではない。そこで豊の上の水練とならないためにも、私自身は以下の二点を心がけている。まず第一に、悪文の例が提示された際には、まず自分で直してみた上で、その後で著者がどのように直しているかを比較検討するようにしている。実際オンラインで提供されているStanfordのWritingのコースでも、そのような形式をとっている⁷。第二に、実際に自分が書いた文章を他人に見てもらおう機会をなるべく増やすようにしている。自分が試行錯誤を経て書き綴った文は思い入れも強いので、実際の読者がそれをどのように受け取ったかに関するフィードバックを得ると、学習効果は高い。もし添削してくれる人が身近に見当たらなければ、参考書に挙げられている注意点に留意しながら客観的に自分の文章を添削してみるのも有用だ。結局、英語で書く力を向上させるためには、自分で書いた英語文章を推敲する力を磨くことが重要だと思う。本稿がそのための一助となれば幸いである。

大久保 達夫
Massachusetts Institute of Technology
Ph.D. candidate in Brain and Cognitive Sciences

【参考文献】

- 1: 是永淳『理系留学のススメ』Writingについて(その一)<http://jun.korenaga.com/?q=node/113>
- 2: 橋本道尚『簡単に英語のライティングが上達する方法』<http://www.michinao.com/blog/2014-06/3569>
- 3: 小野雅裕『The Philosophy of a Bohemian (5) 文章の書き方』(かけはし、2013年1月号) <http://gakiiryugaku.net/newsletters/2208>
- 4: 是永淳『理系留学のススメ』Writingについて(その二) <http://jun.korenaga.com/?q=node/126>
- 5: Gopen & Swan "The Science of Scientific Writing" (American Scientist, 1990) <http://www.americanscientist.org/issues/pub/the-science-of-scientific-writing/1>
- 6: 小野雅裕『宇宙を目指して海を渡る』続・英語下手が英語圏で勝ち抜く策 <http://toyokeizai.net/articles/-/13647?page=2>
- 7: Kristin Sainani "Writing in the Sciences" Stanford Online <https://class.stanford.edu/courses/Medicine/Sci-Write/Fall2014/about>

連載:留学前に教えてほしかったアメリカ大学院の仕組みと仕掛け (1) 効果的な推薦状を書いてもらうために

私がアメリカの大学院に留学しようと決めたのは、慶應義塾大学理工学部物理情報工学科に所属していた学部3年生の終わり頃でした。周りと同じように修士を取って就職するのは普通すぎると思っていた私は、友人が大学院留学についての本を読んでいたのを見て、「面白そう」と借りてみました。日本の大学に物足りなさを感じていたので、アメリカのPh.D.コースでは学費も生活費も支給してくれることを知って、世界的に有名な大学院に進学したい!と思うようになりました。決定的だったのは、研究室配属説明会で「アメリカの大学院に留学しようと思ってるんですよ、慶應からなんて、入れるか分からないですけど」とある教員に話しかけたら、「入れるよ、僕がそうだもん。じゃあうちの研究室に来たらいいじゃない。推薦状も書いてあげるから。」と想定外の返答が。

今から15年以上前の話ですが、この会話がきっかけとなって私は伊藤公平先生の研究室に入り、普通とは少し違う人生を歩むことを決めました。今でこそ伊藤研究室からは毎年のようにアメリカに学生を送り込んでいますが、私がその最初の一人となったのです。UCバークレーのPh.D.を持っている伊藤先生はさすがで、ツボを押さえた推薦状だったので、出願したMIT、スタンフォード、バークレー、UCSBの全てから合格通知をもらうことができました。この中からUCSBを進学先を選んだのですが、ランキングで考えると一番低い大学に決めた理由、それはまた別のお話。

その後、2005年に物理学のPh.D.を得て、スタンフォード大学化学科の研究室でポスドクを務めた後、帰国して東京大学で准教授として研究室を立ち上げ、今は物理工学と電気系工学の学生を指導する毎日です。2年ほど前から海外留学を志望する学生向けの奨学金の審査をすることになり、指導教員への推薦状の依頼の仕方についてアドバイスをすることが多くなりました。この記事では、私がPh.D.やポスドクの頃に聞いた話や、今ではアメリカの大学教員になっている当時の研究室仲間が教えてくれたことを元に、効果的な推薦状を書いてもらうためのポイントを説明したいと思います。

35万ドル

上述の通り、アメリカの大学院では学費も生活費も支給してくれます。主な資金源となるのは、その学生が所属する研究室の教員の研究費です。学費と生活費をそれぞれ毎年3万ドルとすると、学生一人を採ると卒業までの5年間で35万ドルもの研究資金を費やすことになります。ここで、「計算が合わないぞ」「研究室に入る前の分は?」と気づいた人はエライ!ここには、とてもアメリカ的な運営上の工夫が隠されているのですが、これもまた別のお話。大事なことは、学生を一人採るために多くの研究費を投入しているという事実です。

つまり、入学審査委員は「この学生には35万ドル分の価値があるか?」、もう少し具体的に言うと「卒業までに35万ドルの研究費に見合う研究成果を出してくれるかどうか」を一つの重要な評価

軸として審査しているわけです。ここで論文や学会発表など実績があれば評価は楽なのですが、出願者の大半を占める学部生の場合は研究実績など無い人が多数です。そこで最も重要になるのが推薦状です。成績表やGREからは「お勉強」の能力しか判断できませんし、研究経験の少ない出願者本人のエッセーでは信頼性・客観性に問題があります。しかし、出願者の研究能力をよく知っている現役研究者が書いたことは大いに参考になります。

研究の戦力になるかどうか

ではどのような内容の推薦状が評価されるのでしょうか。推薦状を読む人が一番知りたいのは「研究の戦力になるかどうか」です。どのレベルまで自分で考えて研究を進められるか、研究室に一人で放り込んだら何ができるのか、が知りたいのです。それには、こういう指示を出したらこのような作業をしてこんな結果を出してきた、とか、こういう問題に直面したときはこのように解決した、という事例(エピソード)が役に立ちます。どんなスキルを持っているのか、どんな作業がこなせるのか、なども分かるように、とにかく具体的で定量的な記述があると良い判断材料になります。

私の場合、幸運にも効果的な推薦状の書き方が分かっている人が指導教員でしたが、「今からそんなことを言われても・・・」という方は推薦状を依頼する際、書いてもらいたいトピックについて、自分の研究能力を示す具体的なエピソードを整理して指導教員に持って行くといいでしょ。(3つくらいが適切)

【研究能力を示す具体的なエピソードの書き方例】

- をするプログラムを○○言語で0から書き上げ、自分で考えて○○というアルゴリズムを導入して、従来研究室で使われていたものより実行速度を○○倍向上させた。
- 装置を○○測定ができるように改造した。その際、○○種類の部品を○○CADで作図し、工作室で○○を使って自分で加工したほか、内部の配線も自分で行った。
- 新しく導入された○○測定装置を○日間で立ち上げ、その過程で必要になった○○を製作したほか、これを制御するためのプログラムを○○言語で書いて自動化した。
- をする回路を一から設計・作製した。プリント基板を設計し、必要な部品を選定して、○○の性能を満たす回路の実装に成功した。

もし学会発表や論文が準備中であれば、推薦書の中で必ず書いてもらえるようにトピックリストに含めておくべきです。これも具体的に筆頭著者なのか、共著なら何番目なのか、本人が原稿を書いているのか、決まっていれば投稿先も書いてもらったほうが良いでしょう。もう一つ効果的なのは、実際に留学した他の学生との定量的な比較です。研究室の先輩との比較が望ましく、卒論中間発表での評価順位など、定量化できればベストです。

一方で姿勢・態度・性格などは主観が入るので、もし書いてもらうとしても研究で役立っている具体的な様子にしましょう。たとえば、「努力家」ではなく「週末も含めて毎日朝何時から夜何時まで研究に没頭している」、「几帳面」ではなく「実験ノートに詳細に記

録をとっていたため想定外だった重要な条件に気がついた」など。それから、研究テーマや成果の新規性・独創性というのは、指導教員が主導権を握っているものなので、出願者の評価上、そこまで重要ではありません。スペースが足りなければ簡略化して構わない部分です。

残りの2通は

さて、通常推薦状は3通必要ですが、残りの2通はどうしたら良いのでしょうか。身も蓋もない事を言うと、指導教員以外の推薦状は研究能力の評価にはあまり役に立たないので、もし私が審査委員だったら流し読みする程度でしょう。自分の所属する研究室に助教と教授など複数の教員がいる場合には、それぞれに一通ずつ書いてもらうという手はあります。一人だったら3つのエピソードしか書けないところ、6つになるのですから、これは有利です(6つもあれば、の話です)。修士課程に在籍中であれば、学部時代の指導教員にも書いてもらうべきです。共同研究先の教員も、若干弱いですが研究能力の参考にはなります。研究ではないので強い効果は期待できませんが、課外活動で研究に役立つスキルを活用している場合は、そこでの指導者に依頼してもよいでしょう。

研究能力を評価してもらえ推薦者がほかにいない場合、アメリカの研究者またはアメリカ在住経験の長い研究者に面識があれば、英語のコミュニケーション能力について書いてもらうというのも良いアイデアです。外国人を採用する時に一番気になるのが、「英語で研究について議論できるか」ということだからです。英語のプレゼンを聞いてもらったりして、現役研究者の太鼓判を貰えれば、入学審査員も安心します。

他にどうしても方法がない場合、講義を複数履修した教員に書いてもらったり、過去に留学した学生との成績比較を学科長に書いてもらうという方法もあります。この場合も何名のクラス(学年)で何番だったか、というように定量的に書いてもらいましょう。ただし、成績表で確認できる内容と重複するので、その効果は気休め程度です。でも、案ずること無かれ。私も残り2通はこのような推薦状でした。つまり、指導教員の推薦状の内容が良ければ大丈夫なのです。

留学への近道は…

最後に、もう気づいたでしょうか。良い推薦状を書いてもらうためには研究を頑張ることが大切です。実力主義社会のアメリカでは、たとえ有名な先生の推薦状でも美辞麗句で飾られているだけでは評価されず、実力を判断できる事実がしっかり記述されている推薦状が効果的なのです。書いてもらえる「事例」を一つでも多く積み重ねることが、アメリカ大学院留学実現への近道です。



加藤 雄一郎
東京大学 工学研究科 総合研究機構 准教授
University of California Santa Barbara Ph.D. 取得

米国大学院学生会 <http://gakuiryugaku.net/>

【ニュースレター編集部】

原 健太郎 石原 圭祐 高野 陽平
山田 亜紀 辻井 快

newsletter@gakuiryugaku.net

執筆者を募集中!

編集部では、ニュースレターかけはしに掲載する記事を執筆してくれる方を募集しています。ご興味のある方は、上記のメールアドレスにご連絡下さい。また当学生会の他の活動(留学説明会、メンタープログラム)に興味のある方は、当会の学位留学経験者オンライン登録システムに参加お願いします。
<http://gakuiryugaku.net/mp/mentor/login.php>

編集後記

米国大学院学生会の Facebook ページができました。 <http://www.facebook.com/gakuiryugaku> こちらのページから「LIKE」「いいね」をクリックして頂くと Wall に書き込みできるようになります!

米国大学院学生会では2014年12月から2015年の1月にかけて全国8大学(新潟、岡山、東京(駒場)、大阪、慶応、京都、山口、九州)で冬の大学院留学説明会を行いました。今冬の説明会も開催校の職員並びに関係者、講演者、そして参加者の皆様のご協力のおかげで大成功に終わりました。この場を借りてお礼を申し上げます。今回は地方の3大学で初開催(新潟、岡山、山口)ということもありますので、3大学の会場責任者の方達のコメ

ントを中心に振り返ってみたいと思います。初開催ながら開催校の職員の皆様の多大なるご協力もありスムーズに開催に至る事ができ、3大学共通して参加者の満足度の高いものになりました。また、実際に留学準備を進めている学生の方達との出会い、山口大学ではTVや新聞等での報道もあり、今後の更なる活動拡大に向けて大変良いベースを築く事ができました。一方で認知度不足に伴う参加人

数の伸び悩みなど、難しい側面も浮き彫りになりましたので、今後も継続して広報活動を行い、大学側と良いつながりを継続できればと考えております。今回の説明会報告を書くにあたって、岡山大学説明会責任者の美藤 成さん、山口大学説明会責任者の金子 美穂さんにコメントをいただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。(ニュースレター編集部)